

随想「甘え」が日本を滅ぼす

どうすれば強い日本を作れるのか

弁護士 金子博人

第32回 変わりたいのに変わらないのはなぜか (その5)

社会主義国より社会主義的な日本経済では自滅するーその2

1. 日本人は競争が嫌い

資本主義社会は競争が前提だ。競争の中で産業を発展させ社会を充実させる。しかし、日本人はそもそも競争が嫌いだ。競争は「弱肉強食」の世界で、忌み嫌うべきものであった。なぜかと言えば、競争しなくてもすんだからだった。「ムラ社会」では、みなが同じことをやっており、周りと同じである限り何も問題は起こらなかった。むしろ、違うことをやると警戒されて嫌われ、下手すれば「村八分」だ。

競争は人との差を求める行動であり、結果は人との差そのものである。平等とは対極の関係にあるので、結果平等を求める日本人が競争を嫌うのはそれ自体当然のことである。

しかし、「ムラ」を一步出れば、競争の世界である。仲間内だけでヌクヌクとしているわけにはいかない。ところが日本人は「ムラ」を出しても競争が嫌いで、役所の保護を求めて、規制というバリエーションで「ムラ」を守ってもらおうとし、その中で変化のないヌクヌクとした世界を作ろうとする。あるいは談合により競争を避け、仲間だけの「ムラ」を形成してヌクヌクとした「和の世界」を作りたがる。

「護送船団方式」という極めて社会主義的メカニズムは、役所が無理やり作ったものでなく、日本人自身がそれを求めたと言えよう。規制緩和の嵐の中で古い枠組みが

急速に壊れつつあるのに、ついでいけないものが多い。その結果、日本社会は構造疲労を起こしている。それがわかっていても、競争に対する強い嫌悪感が消えず、変わらないまま焦燥感だけが募っているのが今の日本だ。

2. 学校教育が社会主義的経済の根本原因

日本の学校教育は極めて特異である。小学校の教室は先生が生徒に手を挙げさせて答えさせたりして活発である。この風景はどここの国とも変わらない。ところが中学に入ると、突然一方通行の教育となる。先生の板書きすることを、生徒はひたすら写して覚えることとなる。そして、受験勉強が一方通行教育を徹底させる。出題する科目、出題範囲は決まっており、純度の高い「あてがいぶち教育」となる。受験戦争は、あてがわれた枠組みの中の競争でしかない。大学では、大教室で一方通行教育は徹底する。そして、みんな同じリクルートルックで、一斉に就活に入る。企業は、「新卒一括採用」でこれに答える。日本の一方通行教育は、従順なサラリーマン養成を唯一の目標としており、変化のある人生を嫌悪するのだ。採用した新卒は一方通行の教育しか受けていないので、世間を何も知らない。一斉に新人教育をして社風を植え付ける。その後は年功序列である。とはいえ、会社はピラミッド組織である。課長まで

は年功序列が効いても、部長職の数は限られているため、日本の大企業では、部長と課長の間に人間が膨大にだぶつくこととなる。かといって、転職は忌み嫌われ、人の流動性が極めて乏しい、特異な日本社会が形成される。

日本以外の国では、「新卒一括採用」は無い。採用して新人教育が必要な者など、役に立たないので始めから採用しない。自分で努力してキャリアを積まなければ、一流企業は採用してくれないのだ。

韓国は、受験戦争は日本より厳しいが、企業に新卒採用主義などない。意欲ある学生は、高校時代から留学するなど、自助努力することとなる。日本のような「いい大学に入れば、いい会社に入れる」という「甘い社会」ではないのだ。

諸外国では、「二人前にして、一人で生きていけるようにする」ということを教育の目的にしている。これは厳しい社会であることが前提であり、親はいつ死んでも生きても判らない。親が無くても生きていけるようにするというのが教育なのだ。

そのため諸外国では、子供は早くから自立することが求められ、17歳くらいになると自分が将来何になるか真剣に考える。学校も、それを前提に選択肢を多く与える。ここは、自分の人生は自分で切り開き、自分で責任を負うという世界であり、何時までも親頼みの日本とは逆だ。

北欧では、ハイスクールを出てそのまま大学に入るものは少ない。外国に出たり、就職したりして、自分は何が出来たかを試行錯誤しながら探す。そして何を勉強すべきかみえてきたところで大学に入る。その大学は自国の大学とは限らないのだ。

就職も大企業ばかりを目指さない。しかし、優秀であればいつでも大企業に採用される。大企業で10年くらいいた者は、逆にそのキャリアを買われて、中堅企業の経営陣に迎えられ、その企業の発展に尽力することも多い。

自分の就職したところが自分の能力を十分に活かしてくれないとあれば転職にも抵抗はない。キャリアをあげるため会社を辞めて大学院で勉強し直すという選択肢もある。

人の流動性が高いということは、中小企業が発展し大企業と入れ替わるなどという企業社会の新陳代謝も活発となり、ベンチャーによる新たな企業の登場も盛んとなる。このようなダイナミズムにより、変化できる経済構造が可能となる。このダイナミズムの薄弱な日本は、新陳代謝も不活発で「社会主義国よりも社会主義的」と揶揄されることとなるのだ。

3. 40人学級が社会主義人間を量産

先進国の小中学校はどこも20人学級だ。日本のように40人学級というところはない。なぜかと言え

ば、生徒に自ら考えさせて双方向の授業をするには20人を超えては不可能だからである。生徒に考えさせる勉強のためには10人以下のほうがよい。しかしそれでは、費用がかかる。そこで多くの国は限界的20人クラスを基本にするのだ。

しかし、日本の教育者や教育専門家には、そのような意識は乏しい。「20人にして効果が上がるか、実証されていない」、「20人にするのは、人的にも物的にも費用がかかるが、それだけかける意味があるかは疑問である」などという意見を何人からも聞いた。

この人たちに共通していることがある。それは、教育は一方通行であっても、そこに、何の問題も感じないということだ。まさに、日本の教育専門家は、教育勅語が廃止されても、意識の中には教育勅語教育が厳然と生きている。明治以来の「あてがいぶち教育」で十分というのである。自分達も、その先生も「あてがいぶち教育」で育ったので、それ以外の教育手法を知らないというのが主因である。

一方通行でよければ、40人だろうが100人だろうがかまわない。現に日本の大学には、400人も入る大教室がいくつもある。学生も教授もこれに不便は感じない。教育は一方通行でよいとの信仰が日本人にこびりついている。

中国の大学で教えた時、「君たちこれをどう思う」と聞くと一斉に手が上がり、指しもしないのに立

って発言する者もあらわれる。聞けば高校でも一定のテーマに対してグループ分けをして議論をし、それを代表者が発表しさらにクラス全員で議論するようなことを頻繁にするそうだ。自分で考えをまとめそれを発表すると言うのは教育の中核なのだ。

日本に戻ってロースクールで同じことを言うと手は上がらないし迷惑そうな顔をされる。こちらから指さないと誰も意見を言わない。一方通行が「習い性」になっているようだ。

本物の社会主義国は、一律教育でも一方通行教育でもない。その結果、社会主義国が経済を自由化すると、あつという間に日本よりも変化に対応できる資本主義的経済が出現してしまうこととなる。

4. 英語が苦手ではガラパゴス化

一方通行教育は効率的な面もある。知識を詰め込むということ、数学の問題を解く能力の養成には、一方通行教育は実に効率が良い。国際比較をすると、この面では日本の高校生は高い得点を取る。逆に駄目なのが英語教育である。

語学は、読解する、聞いて話す、自分の意志や情報を文章で人に伝えるというスキルを学ぶものである。一方通行では読解の勉強しかできない。大学受験も受験者数が多いので、読解能力だけしかみられない。

一方通行教育の結果、日本の中

高生は、英語で話し、議論し、発表するとか、英文のレポートを提出するという訓練をうけておらず、6年間英語を勉強しても、社会でまるで役立たないということとなる。

読解だけしか教えないということは、水泳の訓練で、理論だけ教えてプールに入れないのと同じである。英語の先生も、プールに入ったことが無いので、プールに入れるべきとは思っていないようだ。一部の先生は生徒をプールに入れないようにするが、40人学級では、生徒が多すぎてうまくいかない。その結果、学校英語は使いものにならないこととなる。

英語で意思表示できないということは、企業活動でも、研究活動でも、文化活動でも、日本人の間でしか活動できないことを意味する。これでは、社会全体がガラパゴス化してしまうであろう。



金子博人
(かねこ・ひろひと)

金子博人 法律事務所。弁護士。早稲田大学法学部卒業。同大学院修士課程(商法)終了。1977年4月弁護士開業。国際旅行法学会(IFTA)会員。大東文化大学法科大学院、日本大学法科大学院講師。市場取引監視委員会委員(東京工業品取引所)。日本フライムリアルティ投資法人執行役員。



金子博人法律事務所

〒104-0061 東京都中央区銀座8丁目10番4号 和孝銀座8丁目ビル7階

<http://www.kaneko-law-office.jp>

掲載内容の無断転載・転用を固く禁じます。